

巻末資料

【 オオクチバス 】

種名	和名:オオクチバス (サンフィッシュ科) 学名: <i>Micropterus salmoides</i>
通称	ブラックバス、フロリダバス(オオクチバスの1亜種)
原産地	北アメリカ
特徴	全長 30~50cm。上あごの後端が眼の後縁の直下よりも後方に達する。体側から背にかけて不規則な暗斑がある。腹側は黄味を帯びた白色。湖沼やため池、河川の中下流域に生息する。 北米での報告によると、雌一匹当たりの抱卵数は 2,000~145,000 個であり、体サイズの大きな雌ほど多くの卵を産む。
定着実績	ほぼ全国的に広範囲に分布。
被害状況	<p>■生態系に関わる被害</p> <p>環境省により選定された「日本の重要湿地 500」に取り上げられた水域のなかで気候条件や塩分条件などにより定着の可能性が想定される 259 箇所のうち、少なくとも 69 箇所(27%)に侵入している。</p> <p>京都府深泥池ではオオクチバス等の侵入後に在来魚の種数が減少したり、個体数が激減したりしている。また、在来種の減少により生物相に変化が生じている。</p> <p>宮城県鹿島台のため池では、オオクチバスが侵入したあとに、絶滅危惧種のシナイモツゴが確認できなくなっている。また、秋田県の一部のため池ではオオクチバスが個体数や重量で優占し、いくつかの在来魚種の生息が確認できなくなっている。</p> <p>ラムサール条約登録湿地の宮城県伊豆沼・内沼では、オオクチバスの侵入・定着後に、希少なゼニタナゴやメダカ、ジュズカケハゼが急減し、いくつかの魚種では全長分布が大型個体に偏るなど、著しい魚類群集構造の変化が確認されている。捕食によるトンボ類への影響も懸念されている。また近年では、その強い捕食圧により生物群集が様々な間接的な影響を受けている可能性も指摘されている。</p> <p>■農林水産業に関わる被害</p> <p>捕食による漁業被害の可能性が示唆されている。</p>
備考	釣魚として人気種であり、各地で意図的な放流が行なわれてきた可能性も指摘されている。一部の観賞魚店では販売されていた。世界規模で猛威をふるっている侵略種であり、イギリスや韓国では生体の持込が禁止されている。



大型個体の頭部



幼魚
全長約 14cm



稚魚
全長約 6cm



出典：環境省 自然環境局 野生生物課 外来生物対策室ホームページ

写真提供：久保田龍二氏、斎藤祐介氏

【 コクチバス 】

種名	和名:コクチバス(サンフィッシュ科) 学名: <i>Micropterus dolomieu</i>
通称	ブラックバス
原産地	北アメリカ
特徴	<p>全長 30~50 cm。オオクチバスに似るが、口は小さくて上あごの後端が眼の中央下まで達しない(オオクチバスでは上あごの後端が眼の後端の直下よりも後方に達する)。</p> <p>湖沼や河川の中下流域に生息する。低水温に対する耐性が強く、また流水域にも適応できる。</p> <p>北米での報告によると、雌1匹当たりの抱卵数は 5,000~14,000 個であり、体サイズの大きな雌ほど多くの卵を産む。</p>
定着実績	長野県野尻湖、木崎湖、青木湖、福島県楡原湖、山梨県本栖湖などの湖沼に定着が確認されている。なお、宮城県内でも七北田川等で確認されている。
被害状況	<p>■生態系に関わる被害</p> <p>カナダの湖では本種の導入後、その強い捕食圧により在来種の減少を含む魚類群集構造の変化が報告されている。</p> <p>南アフリカでは本種の導入後、希少種を含む在来生物の減少が確認されている。</p> <p>長野県の青木湖や野尻湖では、まず、1980年代までにオオクチバスが定着して優占するようになったあと、1990年代に入りコクチバスが優占するようになっており、両種による在来生物相への影響が懸念されている。</p> <p>「日本の重要湿地 500」に取り上げられた水域のなかで、気候条件や塩分条件などにより定着の可能性が想定される 259 箇所のうち、少なくとも 6 箇所(2%)に侵入している。</p> <p>■農林水産業に関わる被害</p> <p>捕食による漁業被害の可能性が示唆されている。</p>
備考	釣魚対象であり、各地で意図的な放流が行なわれてきたことが指摘されている。世界規模で猛威をふるっている侵略種であり、イギリスや韓国では生体の持込が禁止されている。



出典：環境省 自然環境局 野生生物課 外来生物対策室ホームページ
 写真提供：池田洋二氏、久保田龍二氏

【 ブルーギル 】

種名	和名:ブルーギル(サンフィッシュ科) 学名: <i>Lepomis macrochirus</i>
原産地	北アメリカ東部
特徴	<p>全長 25cm。生後約 1 年目までの幼魚では体形がやや細く、体側には 7~10 本の暗色横帯がある。成長するにつれ体高が高くなり体色は濃灰褐色から暗褐色に黒ずみ、横帯はやや不明瞭になってくる。雌雄ともに鰓蓋後端のやや突出した部分の色が濃紺ないし黒である。</p> <p>湖沼やため池、堀、公園の池などに生息し、湖では主に沿岸帯の水生植物帯に、河川でも主に流れの緩やかな水草帯に生息する。河川の護岸や人工漁礁にもよく集まり、小型魚は小さな隙間のある構造物を、大型魚は大きな隙間のある構造物を好む。</p> <p>雑食性であり、昆虫類、植物、魚類、貝類、動物プランクトンなどを餌とする。1回の産卵数は平均的なサイズの個体で 21,000~36,000 粒である。</p>
定着実績	ほぼ全国的に広範囲に分布。
被害状況	<p>■生態系に関わる被害</p> <p>日本各地の湖沼やため池、堀などに侵入・定着し、優占魚種の一つとなっている。環境省により選定された「日本の重要湿地 500」に取り上げられた水域のなかで、気候条件や塩分条件などにより定着の可能性が想定される 259 箇所のうち、少なくとも 46 箇所(18%)に侵入している。</p> <p>滋賀県瀬田月輪大池ではブルーギルが急増した時期にモツゴが激減しており、これはブルーギルによるモツゴの卵・仔稚魚及び成魚の捕食や餌をめぐる競争がモツゴの減少をもたらしたためと推察されている。</p> <p>■農林水産業に関わる被害</p> <p>捕食による漁業被害の可能性が示唆されている。また、本種が多く生息する湖沼では多数混獲されることにより操業に著しい支障をきたしている。</p>
備考	釣り魚として利用され、一部では観賞魚としても利用されていた。捕獲率の向上などの防除対策、防除された魚の持続的利用(食魚としての利用)などの研究が行なわれている。イギリスや韓国では生体の持込が禁止されている。

成魚
全長約 20cm



出典：環境省 自然環境局 野生生物課 外来生物対策室ホームページ
 写真提供：池田洋二氏、斎藤祐介氏